

第6回亀岡市学校規模適正化検討会議 議事摘録

■日時

平成27年9月3日(木) 14:00~16:00

■会場

亀岡市役所 3階 302・303 会議室

■議事

1. 開会
2. 協議・検討事項
 - (1)アンケート調査の集計結果について
 - (2)基本方針策定に向けた提言について
 - (3)意見交換
3. その他
4. 閉会

■意見交換発言内容

(事務局説明「資料1 子どもたちのより良い教育環境について考えるアンケート調査集計結果」)

「資料2 亀岡市立小中学校の学校規模適正化に関する提言(案)」

会長: まずアンケート結果について質問や意見を頂き、その後に学校規模適正化について意見をもらいたい。アンケート結果についての質問があれば、ご意見、感想をください。

委員: 調査対象者の選定については、特別のねらいがあるのか。提言の根拠となりそうな資料が整理されているが、市内周辺部と真ん中、その中間で差異があるのを資料ではどう示しているのか。地域別の中学校ごとの提言をしないといけないと思うが、別紙(クロス集計結果(属性別))を同等の詳細な分析をしてもらうとわかりやすい。統廃合・分離新設は別枠としてそれ以外をみると、どの分野も大半は基本的には「良い」となっている。「わからない」は説明不足であり、反対意見については、説明していけば理解を得られるのではないか。各手法とも7割くらいは認知されるという感覚を持つ。

事務局: 調査対象者の設定の狙いについては、調査母数を固めるために小規模校については全校調査としている。地域別の分析については、地域毎のクロス集計で地域の実態が反映されているので、これを踏まえて提言にもわかりやすく示していきたい。自由意見については、小規模校・大規模校のメリット・デメリットを示しているので、それを踏まえて保護者の方の賛成・反対という意見が出ているものと考えている。

委員: 適正化の手法については「わからない」という人が多いので、わかっているという理解は違うのではないか。小中一貫校についても理解ができていない。

事務局: アンケート設問の説明は短いものしか掲載できていないので、地元の皆さまにも理解してもらえるように考えていきたい。

会長: 特認校等わかりにくいものがあるので、まだまだ説明が不足していることが「わからない」に出ていると思う。全体としては7割位がまあ良いという反応で、これは大きな数字である。

委員: アンケート結果には概ねアンケートとしての答えは出ている。各地域の代表がアンケートを元に答えをだしたらこのような案になるのかもしれないが、アンケート結果から提言案

に至るプロセスが見えてこない。対象校となっている地域の代表に入ってもらい、ヒアリングやディスカッションをして、その意見を反映したものが本来の案かと思う。そうでないとルールの上に乗せられてしまい、委員は行政の露払いになってしまう。

会長：提言に持っていくのに事務的すぎるので地域の意見をもっと聞きなさいという、発言の意図だろう。

事務局：資料2のp2の流れのなかで検討会議を設置して議論してきたもので、その総体としての提言になっている。

委員：検討の結果がこうなることは分かるが、少なくとも問題のある地域の自治会には出向いて行って、それぞれに対してこう対応するというものを入れていく。例えば、西別院、東別院がそれぞれ色々な案を出していたが、それに対してこのように考えているということ盛り込んでいく。学問的にみれば「提言（案）」のようになるだろうし、学校の立場からは困るとは言えないだろうが、言えるのは地域代表や公募市民くらいだ。おおまかな市民の意見がアンケートには入っていると思うし、アンケート結果には異議はない。

会長：この議論は後にさせて頂きたい。アンケート結果についての御質問等はないか。

委員：通学区域の弾力化についての設問は、小規模校の保護者からの回答が多かった。大規模校から小規模校へ行くだけでなく、小規模校からも希望すれば大規模校へ行けるという理解での回答かと感じたが、質問の主旨はそれで良いか。

事務局：その通りです。

委員：小規模校の保護者は今の小さな学校でなく違う学校へ行かせたいという趣旨で答えているのだと思う。

委員：感想だが、肯定、否定、賛成、反対とか多様な意見が出ているが、全てをこの結果に当てはめるのはまずい。提言には隙間をもたせた対応が必要かと思う。また地域と学校のつながりが強いことを感じた。

会長：アンケートは「どちらですか？」という間になっているが、それをもう少し弾力的に見ていった方が良いという意見だろう。

委員：東別院小・西別院小の自由記述をみると、急いで欲しいというものがかかなりある。亀岡市の対応が遅いのではないかという意見。これに子を持つ親の意見が集約されているのではないか。また、わからないという意見に対しても重点的に考えてあげることも必要かと感じた。

会長：自由記述をもっとしっかりとみていくべきという意見。

委員：資料2のp17に適正な1学級の学級人数を設定している。アンケート結果をみるとその通りかと疑問を持つ。20～34人で線を引くよりも、将来のことを考えると30人で抑えるほうが子どもにも先生のためにも良いのではないか。

委員：東別院小・西別院小の方は非常に切迫感があり何とかしないとイケないというものが伝わってくる。小中一貫校への賛成が多いのにも反映されているだろう。高田中・川東小がすでに小中一貫校になったなかで、全体としてはまだ意見が割れているかと思うし、3割の方は成果が「わからない」としている。一方、東別院小・西別院小の方は「ふさわしい」「どちらかといえばふさわしい」が多く、実態はよくわからないが今を変えるためにはこういう手段を選ばざるを得ないと考えられているのではないか。小中一貫校については、

まだまだ実験的な取り組みなので、10年位は成果をみていかないとプラスなのかマイナスなのかわからないだろう。

委員：小中一貫校は「中1ギャップ」を何とかするというところから始まっているが、その効果について、教育は20～30年をみつめてやらないといけないものなので、すぐには成果が見えてこない。

委員：東別院小・西別院小は切迫していて、PTA活動も人数がいなくてできない。子どもを守る活動もできないので迅速に取り組んでいった方が良くと思う。

委員：うちの「広場」に来ているお母さんで、まだ子どもは2歳なのですが、地域の子どもが少ないので近い将来に統廃合がされるという噂を聞いて、引っ越しをしてしまった人がいる。ちょっと早とちりではないかとは思いますが、乳幼児を持つ人で、噂を聞いて実行に移す人がいる。

委員：アンケート結果は予想通りのものかと思う。大規模校のそばに小規模校があるのは校区の見直しで解決ができるので検討していけば良い。東別院小・西別院小の問題については、これから7回、8回と会議をしていく間にその地域の意見を聞いていくということも一つだと思われ、その学校のPTAの本部の人やその他の会員、自治会の人も交えて会合を1～2回はしたほうが良いと思う。

会長：アンケート結果を踏まえて、適正化に向けた提言に移りたい。アンケートを踏まえて合理的な解釈ならこうなるだろうが、もう少し血の通ったものにしないといけないという意見があった。

委員：以前に、旧亀岡町、約6500世帯ある地域で、亀岡小があったところに城西小ができ、一部がそちらに行ったことにより、子供会活動もできなくなり、それが現在も定着してしまっている。さらにつつじヶ丘小ができて亀岡小から行くことになったときは、賛否でまちが二分した。例えば昔は亀岡町の財産区の山を売って亀岡小の体育館を建てたりしたが、その財産はどうなるのかという議論もあり、自治会とPTAがもめる種になった。地域がもめないような施策を綿密に検討すべき。地域が分かれたところから合併するなどすれば、思いもよらないところから問題が起こることもある。ここには自治会代表は6人いるが、全市には23人いる。この案がいけないというわけではないが、その点を留意しておかないと後で困ることにもなる。これは地域の中で一人ひとりが問題を抱えているものなので、慎重に進めるべき。

会長：この検討はいずれ実現するが、皆が上手くいくように過去の事を学び、慎重にすべきということ。

委員：ここで議論しているのは総論であり、地域に持ち帰れば意見が山のようにでてくる。総論はそれで良いが各論に入るときは各地域で説明会や意見集約をするなり、それを持ってもう一度ここで議論するようにしないと後世に禍根を残すことになる。

委員：中心部の校区見直しは緊急性がある。人口が減っていくなかで財政面も含めて統廃合は避けられないことだと思う。周辺部にとっては大きな問題であるが、一定まとめていかないといけない。魅力ある学校づくりを進めるなかで特認校制度などもできるのでそれが大前提である。この地域はこうすべきであると示すのではなく、事務局が一番望ましいと思う姿を叩き台として出していき、28年度からこの方向を深めていく。今の段階で地元の意

見を色々と出してもらおうとまとまるものもまとまらないのではないか。

事務局：昨年度の最終会議において、中学校ブロックで考えていくのが望ましいだろうということになり、今年度第5回会議で中学校ブロックの考え方を示させて頂いた。提言を受けて教育委員会が基本方針を持って地元の説明をしていきたい。

委員：今ここに集まって話をしている提言を、また地元で揉んで意見を聞いて提言するのは難しいと思う。事務局サイドでアンケート等の細かい情報をとっていくことも大事だと思うが、地元に入り込んでいってもまとまりがつかないのでは。

会長：緊急性を要することもあるので、我々で態度を決めていかないといけないと思う。

委員：東別院、西別院が問題である。アンケート結果で決めて良いのかということ。歴史があり石田梅岩の生誕の地でもある。昔は地元が寄付をして小学校、中学校ができたように、地域と学校が一体だった。教育委員会だけで方針を押しきれないのでこういう会議のプロセスを踏んでいるのだと思う。あるお寺の住職は、地域には学校とお寺が無くなってはダメで限界集落になってしまうので、児童生徒が一人になっても学校は残すべきであると言っている。実際は3年・5年先には5人、8人くらいになるそうで1人になるわけではない。廃校には大反対である。

会長：学校には歴史がある。多くの学校が明治時代に寄付でできあがってきた。そういうことも思っ考えるべきということ。

委員：叩き台として出しているが、これについては特に意見はない。これからどのような開発が進みどこに人が増えるのか減るのか、それに伴い学校の過不足がどうなるのか、情報が無くどう考えてよいかわからない。人数が減ってから動くのではなく、それまでに危機感がなかったのか。新しいことをしようとすれば厳しい判断が必要で、やめるところ、統廃合すべきところはしてしまうしかない。本当に人口が減っている地域は別の戦う手段が必要である。地域で相談してこんな魅力があるということを、何回も意見を出し合っていないと、その繰り返しをやらないと駄目だ。これは叩き台で良いので地域にこれをおろして話をして、その反応を見てまた会議をしてというプロセスをしていかないと、ここだけで話をして進まない。

会長：特認校や魅力のある学校を発信することも大事なことである。適正化の手法の議論の前に配置の問題や人数の件はこれで良いのか。12～18学級を適正とし、これに準じる規模が示されている。学級数についても意見はないか。

委員：私は亀岡市生まれ・育ちで教師になってからも亀岡で過ごした。亀岡に魅力がないと言われるとショックを感じるが亀岡は魅力が一杯ある。亀岡中学校では50数人のクラスで、教師になっても13学級とか16学級を持った。その経験からいうと、34人学級は多すぎ、30人を切ってほしいというのが希望。

会長：国は40人学級（小学校一部は35人）で国際基準は35人。それにあわせて35人学級を想定しマックス34人。ミニマムの方が問題。20人は良い線で、あまり少ないと学力面からは良くない。文科省の学力政策は20人以上を想定しており、アクティブラーニングを推進しているがこれは少なすぎるとダメで、20人が良い数字である。私は34人で良いかと思う。

委員：アンケート結果をみると、もう少し少ない人数を望んでいるのではないか。

委員：今話しをしているのは児童数の少ない学校をどうするかを議論しているので、理想論をしても意味が無い。榎田小学校が街中からバスで通学している例など調べているのか。そういう方法も進めて大きな学校から生徒に来てもらう。自然の多い学校が良いという父兄もいると思うので、そういう方法も考えてもらいたい。

委員：緊急性のある問題なのだから、事務局は足を運んで問題のある学校、地域に入り、もっとスピードをあげて検討すべきだ。地域にとっては重要な問題なので、地域の意見をもっと拾いだして次の会議にかけるなどピッチをあげる。各論をもっと拾い上げて総論に仕上げるようにしないといけない。アンケートから学術的に答えをだすだけならこの委員会は不要である。この会議で総論を決めるならば、事務局で各論を拾ってきてそれを反映し、(地域の事情については) 特例も入れて総論にする。早く動いて地域の問題を拾い上げてくるべき。

委員：緊急性がある、早急に決めるべきというのはなぜか？

事務局：複式学級のある学校が3校あり、将来的に複式学級が見込まれる100人を切っている学校も多くあるので、このまま人口減少が進むと大きな問題になる。

委員：そういう地域へ行って意見を聞いてくる。アンケート結果や学問的な数字によって答えが出ているが、それだけなら学校規模適正化検討会議は不要だ。会議としては様々な意見を聞いて適切なものにするもの。総論はこうだが、地域の事情に応じてこうもできるという話をひとつひとつまとめてくる。そうしないと各地域で、地域の代表としての自分たちの立場から意見がまとまらない。

委員：そのあたりはまとめ方で対応できるのではないか。基本方向が望ましいがこういう課題もあるので、そこを踏まえて地元で協議してほしいといったようなことを入れる。他方、事務局として委員以外の地域の具体的な意見を聞くというのはあっても良い。周辺部の中学校で12学級というのは現実的には考えられないので、小学校はわかるが、中学校では「6学級から〇学級」とかにしないとありえないと思う。学級の人数規模については、一定の教育をするには20人は必要というのものもあるが、小規模校・大規模校にメリット・デメリットあるが、小規模校のメリット・デメリットがいえるという人数があるはず。大規模校のデメリットは体制の整備等で何とか解消できるが、小規模校のデメリットはどうにもならないので、それを特化して考えていかねばならない。

会長：中学校の学級数の適正規模については、どのように考えるか。

委員：適正に準じる学級数は、現実的には3学級も考えられるが、やはり「6~12学級」もあり得るだろう。

委員：やりとりが専門家の会話で理解できない。

委員：議論が噛み合っていない。地域のことについては話ができるが、教育学のことは意見が言えない。議論を絞ってほしい。

会長：基本的な考え方の学級数、学級人数の数字がこれで良いかを確認してもらいたいということ。適正化の手法に意見が偏ってしまうので、まずは人数を確認してもらいたい。

委員：保護者の意見として、最低でもクラス替えをしてほしい。毎年同じ面子で、ヘタすると9年間同じというのは何とかしてほしいという声をよく聞く。中学校へ行けば、部活をもっとしっかりと、団体戦をやりたい、チームプレイをしたいと聞く。だから適正なクラス数

というのは最低限1学年2クラス以上というのが理想で、たぶん多くの保護者の意見だと思う。過疎化等地域の実情はあると思うが、一番考えないといけないのは子どもと保護者の意見を尊重すべき。急いでいるのは、自分の子どもも来年は卒業してしまうので、議論している間に自分の子どもは卒業して関係のない話になってしまう。だから早く決めて欲しいというのが切実な願い。アンケートの自由記述に書いているのが保護者の切実な声。適当に書いているのではなく、ここに書いたら意見をみてもらえと思って一生懸命書いていると思う。生の声を大事にしてほしい。

委員：提言が出た後、答えはいつ出ていつ実現するのか。

事務局：緊急性の高いものについては、H28～30年度の3年を目処に、その形に持っていく予定である。

委員：提言を出した後に中学校区に行って実情を聞いてまとめるのか、その前に地域に行くのか。

事務局：次第の裏にある流れです。地域別の規模適正化の方向性の中で短期的・中期的・長期的に各中学校ブロックの考え方を提言に出して行く。それに基づき教委の方針を出して、各段階3年の間に適正な学校規模になるように地元に入って説明し、例えば空く学校が生じるなら地域のためにどう活用するかなども含めて説明しながら地域と共に考えていきたい。

委員：提言の文章をコンサル任せにして日本全体（で通用する一般的な）ものにしないでなく、亀岡の血が流れるよう、事務局が地域に入って提言にまとめていくようにしないとけない。多少お金がかかっても、特例の学校や特殊な学校ができるように地域と共に努力するのも一つの方法。せつかく各地域、色々な立場の人がこの会議に入っているのだから、その意見を反映した立派な提言となるように望みたい。地域に入ってほしい。

会長：適正な人数規模については一旦切って、委員の意見を踏まえて、適正化の手法についての意見をもらいたい。

委員：提言はこれで良いと思う。これを地域の叩き台として出して、各地域でどう考えるのか、PTA、自治会、教育委員会で話をしてもらおう。自治会長の意見とアンケート自由記述の内容が同じ地域でも少し違っていると思う。東別院、西別院でも早く統合してほしいという意見が多く、自治会とPTAで思いが違ふ。親の思いとしては子どもにこう育ててほしい、自治会としては歴史ある地域を守っていきたい。同じ地域の中でも新しく来た人と昔からいる人の温度差を感じている。親としては、野球やサッカーなど人数がいなくてできない競技は、今でないとできないので急ぐ必要がある。これを叩き台として地域毎に話し合うのが一番早く良い流れができる。この会議のような感じで校長先生のほか学校区に関わる人に話し合ってもらえようか。

会長：まとめると、原則としてはこの案が良いが、のりしろとして地域の意見を入れて、弾力性を持たせる。地域の特性があるので、弾力性の中身として地域の意見を入れていくというのでどうだろうか。

委員：その方が早く物事が決まると思う。

委員：まずはこの案を消してもらい、たぶん結果的に概ねこうなるだろうが、後で禍根が残らないように、問題のある地域については2回、3回と足を運びわかったとなるまで意見を聞き、最終的にこれをまとめるべきである。

会長：大変ではあるが、教育委員会も汗をかいてもらう方が良い。

委員：地域に入り細かいことを聞いて持ち帰ってくるということは正論ではあるが、アンケートと同じで色々な意見が出て、多くの意見があったということだけが結果になりそうだ。これまでも教育委員と一緒にPTA等に聞いてきている。すべての人の意見を満足させる手法は無いので、この会議において、教育的、地域的、保護者の立場の代表的な意見で、これで地元に入るというある程度の線を決めてもらわないと、意見を聞くだけになってしまう。いずれは地域に入るが、地域に入っていくためにも、こういう地域はこのような手法が良いという基本的な考え方を、提言としてここで決めてもらえば行きやすい。

会長：遅いという意見もあるので、この案で入ってはダメなのか。個別のことは書いていないが、これを踏まえて意見をもらったらい。

委員：まとまらないから意見を聞かないのではなく、最終的にこの案になるとしても、百の意見が出るとしてもそれを聞いておくべきだ。色々な意見があったがこうなったという結論になるにしても、汗をかいておくべき。

委員：課題のある地域へ行く方向で検討する。

会長：結果がどうであれプロセスが大事なので、アンケートだけでは不満という意見もあるので、意見をいう場が必要である。

委員：小規模校の実情や大規模校の運動会を見てもらう機会なども設けても良い。

会長：自治会の人意見も、当事者の若い人の意見も十分聞いて出して頂ければ良いと思う。進め方としてこれでよいか。また基本的な考え方については、原案の案程度で、地域にも持っていく前の案として、これでよいか。(反対意見なし)
それでは本日の会議はこれで終了とします。

事務局：次回日程は、11月10日午後2時から予定。

以上